

●ロカベン活用で目標が明確化。 販売先のシフトで売上・利益拡大！

企業側情報

- 商号 : 西郷ゆば工房
- 住所 : 〒961-8001
福島県西白河郡西郷村大字羽太字馬廻35-2
- 業種 : 食品製造販売
- 従業員数 : 1人
- 資本金 : 一(個人事業主)
- 売上高 : 650万円
- 代表者名 : 近藤武男
- URL : <https://www.nishigo-yubakobo.com/>

支援機関情報

- 商号 : 西郷村商工会
- 住所 : 〒961-8091
福島県西白河郡西郷村大字熊倉字折口原69番3
- 業種 : 支援機関(商工会)
- 代表者名 : 仁平喜代治
- URL : <http://fukushima-kennan.or.jp/nishigou/>

ロカベン活用前の状態

●事業内容

「大豆を地域の特産物にしたい」という創業者の想いから創業した。現オーナーは以前から大豆を栽培しており、同社に栽培した大豆を卸していた農家であったが、前オーナーが高齢を理由に退くということで、事業を承継した。また、承継をきっかけに、自らが大豆の生産・商品加工・販売を行うといった6次産業化を企図。2017年からは、西郷村羽太地区に工房を自ら新築し、西郷ゆば工房として「ゆば」「豆腐」「豆乳」の製造販売を行っている。

●ロカベン活用の狙い

平成30年に当社が商工会に加盟しており、令和元年に持続化補助金申請に関する対話が当社と商工会の間でなされていた。また、商工会としては、持続化補助金申請時にヒアリングした内容を含め、当社大豆が地域の特産品としてアピールできる商品だと感じており、今後本格的に同社を支援していくため、令和2年にローカルベンチマークの活用を提案した。企業側としては事業を前オーナーから引き継いで以来、特に振り返ることなかったため、一度これまでの経営を振り返り、自分らしさの出る経営をしていきたいと思ったことがきっかけである。



対話の視点

- ①まずは持続化補助金申請時にまとめたデータをローカルベンチマークに落とし込む。
- ②ローカルベンチマークの作成については、商工会、経営者、経営者の奥様の3者で作成に取り組んだ。また、将来を構想するために経営デザインシートにも取り組んだ。

対話結果

明らかになったこと

経営の強み

- ・「ここでしか作付けしていない無化学肥料、無農薬の西郷村在来種大豆」を使った商品づくり。
- ・自ら栽培して提供できるという安心安全な商品づくり。

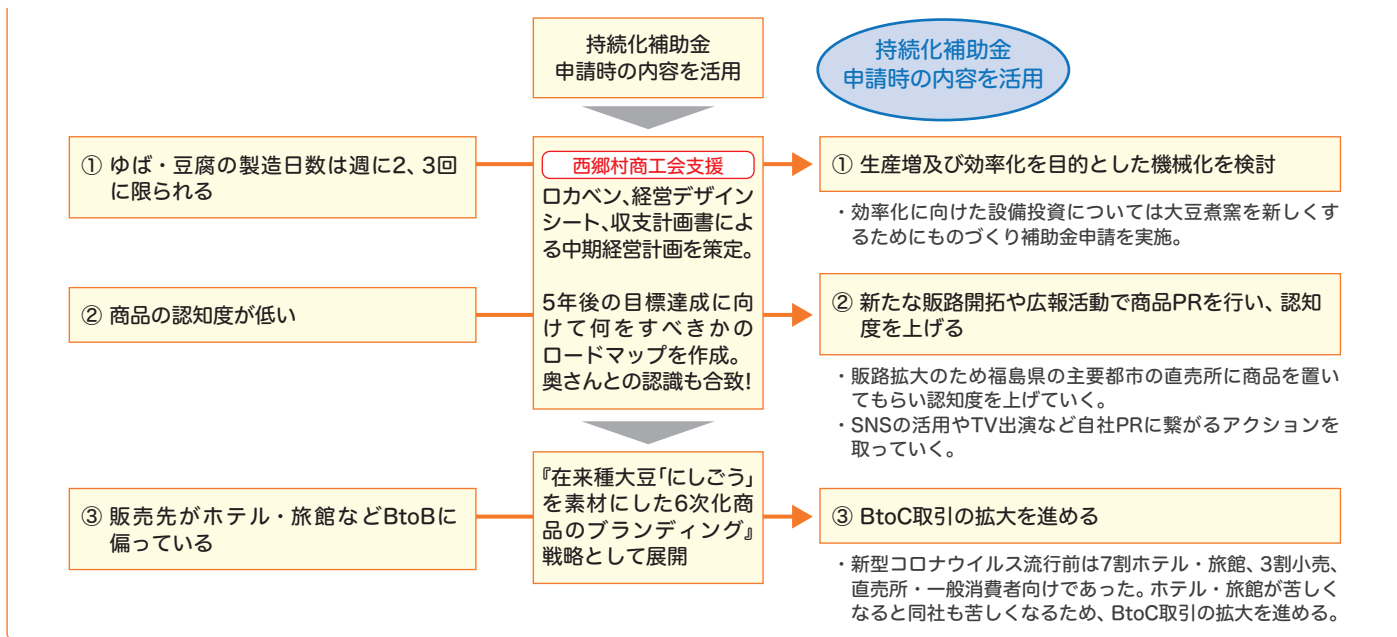
経営の課題

- ・ゆば・豆腐の製造日数は週に2、3回に限られること。
※同社は農業も行っていることから、農業に時間を使わざるを得ない状況である。
- ・商品の認知度が低いこと。
- ・販売先がホテル・旅館などBtoBに偏っている。

対応策

- ① 生産増、及び効率化を目的とした機械化を検討する。
- ② 新たな販路開拓や広報活動で商品PRを行い、認知度を上げる。
- ③ BtoC取引の拡大を進める。
- ④ 具体的な売上高目標、及び販路拡大ターゲット先を策定する。
- ⑤ 5年後の目標達成に向けて何をすべきかのロードマップを作成する。

対応策の実施



対応策実施後

効果

・ものづくり補助金の申請については不採択となったものの、経営改善活動により、以下の結果が得られた。

- ① 売り上げは2019年から2020年で25%増。
- ② 営業利益は2019年から2020年で18%増。
- ③ ローカルベンチマーク財務分析結果の総合評価もBからAに向上。

- 直売所での商品取り扱いやSNSの活用等により、以前はBtoBとBtoCの売上比率が7:3だったが、現在は3:7と逆転。
- BtoCの取り組みに伴い、全体の売上増、利益増が実現できた。

自社HPでのBtoC販売やSNSを活用したPR



後継者／支援者の声

経営者の声

当初は商工会の言われるがまま、ローカルベンチマークの活用を始めたが、共同で事業を営む妻と今後について話し合うことができたことが良かった。また、自社の強みや課題、今後の目標を具体的に見える化したことにより、共通の目標となったことで将来に向けた取り組みを行いやすくなった。今後は2025年の売上目標を1,000万円と定め、さらなる売上拡大を目指し、『在来種大豆「にしごう」を素材にした6次化商品のブランディング』を進め、大豆を地域の特産物にしていきたい。

支援者の声

ローカルベンチマークを切り口に経営状況のヒアリングを行い、さらに経営デザインシート、収支計画書を組合せ活用することで中期経営計画の策定ができました。これにより将来のあるべき姿を家族や支援機関と共有でき、またお互いの役割を明確にすることができました。支援者として目標達成に向けた伴走支援を実施していきたいと思えます。